

2020年度 入学試験問題
(B日程入学試験 2月14日)

国 語

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、21 ページあります。

試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

3. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

① 氏名欄

氏名・フリガナを記入してください。

② 受験番号欄

受験番号を数字で記入してください。

③ 科目欄

解答用紙の科目欄の右の「○」にマークしてください。

4. 解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、解答番号 **10** の問いに対して **③** と解答する場合は、次の(例)のように解答番号 **10** の解答欄の **③** にマークしてください。

(例)

解答 番号	解 答 欄									
10	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

5. 解答用紙の注意事項を正しく守ってください。特に、訂正する場合は消しゴムでいねいに消し、消しきずはきれいに取り除いてください。
6. 試験終了後、問題用紙は各自持ち帰って下さい。

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「虚実皮膜の間」という近松門左衛門の言葉がある。芸の在り処を言っているのだが、また当然のことながら、一つの美の構造を示しているように思われる。虚構に美があるのではない。現実が捉えられなければならないというのでもない。虚構と現実の二重性、そのオーヴァラップ、そこに生まれるずれ、あるいは裂け目に美があるのだ。これは近松どころかもっと古い、いまさら言うまでもない陳腐な思想のように思われるが、いま一度考え直してみる必要がある。

一般に、二重なものの評判は人間の性格や行動に関わると芳しくない。二重人格、表裏のある人、本音と建前、そとづらとうちづら等々、二つのものの乖離かいりの甚だしさが非難されるのだが、といって二重なものはまた乖離が不十分だと、ハッキリしない、曖昧だ、偽善だといって責められるのである。それというのも「真実は一つ」だからだ。実際家は真実の複雑さ、その二重性を指摘するかもしれないが、そのときはそれが真実として主張されている。たとえ声高に主張されずにせよ、これこそ真実という排他的な在り方をなぜか真実はいたく好む。なぜかどころの騒ぎではない。そもそも真は、偽を排他的かつ絶対的に拒絶することによって真となったのである。

確実な学問の基礎を見出そうとして、デカルトはおのれの内部から疑わしきもの・曖昧で混雑したもののいっさいを追い出し、それを偽として分離し、「明晰めいせきにして判明」なものを真として確立した。これは逆に言えば、真は真であるために、「真らしさ」ではなく真だけであるために、偽を必要としたことである。真は、自己確立のために必要な偽を外部に追い出した、あるいは偽を外部に追い出すことを必要としたということだ。

A

B

この結果、いわばAを貫徹して透明と化した真は、空無化し自壊しないために、偽りに満ちた外部世界に確実な客体を発見せねばならないことになった。それを発見したとき、内部は外部に、主体は客体に見合うものとして保証されるのである。こうして真は、認識における主客の照応・一致として定義され直すことになる。このプロセスは本当は逆に考えたほうがいいのかもしれない。つまり認識における主客の照応・一致を求める働きが、主と客の純化へ向かったと言うべきかもしれない。いや、それはそもそも循環しているのだろう。それよりもいま見るべき点は、真が云々うんぬん

れるとき、つねに「C」と「D」が問題にされるといふ、そのことのほうである。言いかえれば、真において二重性あるいはずれば、弱みであり、克服の対象なのだ。

「一致」型の真理観は、いまでも大手を振って歩いている。「実在との対応」という奴である。だが、実在はそれに対応しようとするときにこそ姿を消す。そのことに気づき、出来合いの「一致」を求めていた自分の浅ましさに嫌気がさすと、主客いずれかに権利回復の要求が出されることになる。この回心はあちこちでいろんな形で起こった。フツサールの現象学もそうした回心の一つだと言いたくなる。スピノザが真なる観念の内在的規定、充全性の真理観を提出したことが、もう忘れられてしまったのだろうか。

主客の照応・一致という俗流デカルト主義真理観を、スピノザは根底的に転倒する。根底的に転倒するとは、それをただひっくり返すことではない。その真理観の出所へ戻って、そこに見出される精神を肯定しつつその根底を穿つ^{うが}ということである。スピノザは言う、真なる観念は充全でありそれ自体で規定されているがゆえに、必然的な仕方で自己の対象に対応する、と。それは言いかえれば、自己が内在的に肯定されるとき、自己が自己であるとき、他との関係は必然的に結ばれるということだ。表面的な反デカルト主義から限りなく遠いスピノザ。デカルトの精神を受け継いで再興しつつ、デカルト主義を破るスピノザ。一致と従属は紙一重、いや表裏一体のものでしかないと喝破する見事なポリティック。ただこのスピノザさえも、真実は一つ（「神が唯一の実体」）であり、真実の二重性は同一のもものが異なった形式の下で考えられているだけである（「精神と物体は唯一の実体の属性」とする）のである。こうして見ると、真実は一つというより、むしろ一つということが真実なのだ、と言ったほうがどうやらよさそうだ。

プラトンの善のアイデアを持ち出すまでもなく、善もまた究極的には一つである。真における主客の一致は、ここでは言行の一致となる。下心、裏、計算というものほど善と相容れないものはない。隠れた善行ということがこれを逆説的に物語る。表に出ることは打算の裏返しと見なされる。善人は打算よりもむしろ盲目的行為を好むだろう。善は感情の自然な流露・発出であり、超越的な価値への一途な憧れ・希求であり、そうした思いと行動の調和なのだ。清らかさこそ善のなによりの表徴といえようが、清める、ケガレを除くというのは、二重性を排除し純一さを取り戻すことである。この点で善は真以上に二重性を嫌う。意識された善行というものはない。自意識の二重化をこうむった途端、善は姿を消している。もちろん、良き思いから発しても行き違いやずれば避

けがたい。むしろそれが通例かもしれない。しかし、それはけつして良き思いの側の責任とはされない。それどころか、そうした現実面での齟齬そごは純一さの証拠として良き思いを正当化する。仮に過ちがあつても咎とがめられることなく温かく見守られ、あらたな精進と上昇の契機とされる。いずれにせよ、それは二重性の容認とは似ても似つかないものだ。

真や善で否定される二重性は、美においてその立場を逆転する。二重性Fはある意味で美に必須である。というより美は、事物がけつして単にそれだけの事物ではなく、二重の意味を持って他の事物とつながっていることに気づくことから始まると言つていい。単純素朴な美、巧まざる自然の美はどうか、と言われるかもしれない。しかし、自然そのものは美でも醜でもない。人間がそれがある関係性のなかで美と見立てるのだ。人の手の入らない自然の美という言い方自体が、その逆証である。そして言うまでもなく、芸術の美は技術、すなわちものへ働きかけ、ものを人間に接近可能にする手立てや道具なしには考えられない。というよりも、その間接性が美となるのだ。技術とはものへの働きかけだが、ここで肝心なことは、それが一方的な働きかけではなく、そこにはものからの働きかけも存在することだろう。この点についての証言は枚挙にいとまがない。人は物質と向き合うことにより、自己の内部の物質性を発見する。それはまた、ものの内部の精神性に気づくということでもある。反撥はんぱつ、応答、共振がそのとき起こるだろう。この二重性が作品の内部に転位される。音楽におけるデュエットのみでなく、コレスポンダンス、レゾナンスというものは絵や詩、いや芸術のあらゆる分野の基本的原理だと言つてよい。なぜだろうか？ それは真や善が一つであるのに対して、美が一つではないからだと言えないだろうか。真や善が一致あるいは収斂しゅうれんの一方方向性に成立するとしたら、美は収斂と発散の二重性のなかに成立するのである。

ギリシア神話の三女神の美貌比べはなかなか示唆的である。アテーナーとヘーラーとアフロディーテーの三女神で誰が一番美しいか争いが起こったとき、彼女たちを等しく愛するゼウスはその審判を求められて困惑する。ヘルメースが使いに出されトロイアのパリスに判定が委ねられるが、パリスは美の度合いによってはこれをなさない。三女神が約束する褒賞のちがひによってこれをなすのである。アテーナーは戦いの秘訣ひけつを、ヘーラーは小アジア全体を支配する玉座を、アフロディーテーは美女ヘレネーの褥しとねを約束する。パリスは富や名誉ではなく、見目麗しい伴侶を選ぶだろう。その結果、トロイア戦争が起こるだろう。この話の教え

は、美は **G** であり、それを一つにしよとしたり優劣をつけよとしたりすると争いが起こること、美の判定は当の美以外の基準によってなされること、しかし選ばれるのはさらに別の美の約束であり、その結果、争いがまた拡がるということである。拡大した争いから、『イーリアス』『オデュッセイア』という美がさらに生まれた。

小林秀雄に「花の美しさというようなものはない。美しい花があるだけだ」という言葉がある。べつに小林秀雄専売の思想ではないし、この内容からしても専売特許はありえないが、この言葉もまた、美が **G** であること、そして美が現場にしかないことを明確に告げている。問題は、その現場がどこで、どのようになっていっているかだ。

美が **G** とは、言いかえれば、美が何も否定せず排除しないということである。美は美であるために醜を必要としない。美醜は、真偽や善悪のような敵対者でもなければ、共謀者でもない。美そのものは争わない。ピカソは美神よりも速く走ると言ったのはコクトーだったが、美神は競争することもなくピカソに楽々追いついてしまった。といってしかし、美神はつねに変わらない自己の見地から一方的にピカソに判定を下しているわけではない。

無数の美と同じように、無数の真実があり無数の善行がある、と人は言うかもしれない。 **H**、無数の真実と善行は超越的な価値にタテに連なろうとする。より真に近い、より善の理想に近いということが言われうるのである。だが、より美に近いということはありえない。美は美であるか、美でないかだ。美はあらわれるそこ以外のどこにもない。その意味で、美との距離はつねに **ゼロか無限大だ**。美はあらわれでしかないが、といってしかし、何かのあらわれではない。ミケール・デュフレンヌの『審美経験の現象学』はそれほど時代を劃した書物とは思われないのに、出版後五十年近くを経た今もときどき思わぬところで引き合いに出されて驚かされるが、美ほど本来現象学に適した領域はないのかもしれない。しかしまた、美ほど存在の真理と混同されて、失われたもの、それゆえいつか来たるべきものとして、哀惜と憧憬の対象になったものもない。

問一 空欄部 **A** に入る最も適切な語句を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

1

① だからこそ

② しかし

③ それでも

④ そして

⑤ やがて

問二 空欄部 **B** に入る最も適切な語句を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

2

① 二重性

② 精神性

③ 親和性

④ 同一性

⑤ 類似性

問三 空欄部

C

と

D

に入る最も適切な語句の組み合わせを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

3

。

- | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| C .. 分離 | C .. 本質 | C .. 類似 | C .. 一致 | C .. 相異 |
| D .. 一致 | D .. 現象 | D .. 相似 | D .. 調和 | D .. 分離 |

問四 傍線部E「自意識の二重化をこうむった途端、善は姿を消している」とはどのような意味か。具体的に説明している文として適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 4。

- ① 善とは意識と無意識のずれによって発せられる感情であり、そうした思いと行動との一致である。打算や狙い、下心といった意識のもとでなされる行いは善ではない。
- ② 人間は時として下心、裏、計算がともなう行為をする。しかし、そういった思惑を抱えたまま相手のためにとった行為だとすれば、それは善とは言えないのである。
- ③ 人間は良い行いをしようとしても、自分をよく見せようとする意識がどうしても生まれる。しかし、たとえそのような感情が生まれても為すべきことを為さないのは善ではない。
- ④ 周りの期待に応えようと努力して、自分が正しいと思うことをやり通すことが善である。したがって、努力をしなくなった時点で善とは言えないのである。
- ⑤ たとえ打算や下心といった感情が表れても相手にとって良い行動であれば、それはすべて善なのである。したがって、ある行為が相手のためにならない時点で善とは言えないのである。

問五 傍線部F「二重性はある意味で美に必須である」とはどういう意味か。具体的に説明している文として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **5**。

- ① 美とはその人の認識と対象となる事物の関係性の中で成り立つ。
- ② 美とはその人と周囲との認識のずれの中で成り立つ。
- ③ ある事物に対して美と知覚するのは、その人の趣向による。
- ④ ある事物に対して美と認識できるのは、人間に与えられた特質である。
- ⑤ 美と規定するのは、その人が生まれ育った環境によるところが大きい。

問六 空欄部 **G**に入る最も適切な語句を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **6**。

- ① 絶対
- ② 同一
- ③ 複数
- ④ 精神
- ⑤ 認識

問七 空欄部 **H** に入る最も適切な語句を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **7**。

- ① そして
- ② しかし
- ③ ついに
- ④ だから
- ⑤ また

問八 傍線部 I 「美との距離はつねにゼロか無限大だ」という記述の具体的な内容として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **8**。

- ① 美とはそれが美しいと思うか、そうでないと思うかだ。
- ② 美しさの定義は一つではない。
- ③ 美と認識するには、多くの時間がかかる。
- ④ 美しさを規定するのは、本人ではなく周囲の人間だ。
- ⑤ 美を美と規定するのは困難だ。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

9

く

13

1 一日中、研究にポットウする。

9

- ① 頭 ② 討 ③ 当 ④ 投 ⑤ 透

2 その企業の内部リユウホは、かなりの額に達している。

10

- ① 流 ② 溜 ③ 立 ④ 留 ⑤ 粒

3 労働の対価として、ホウシユウを支払う。

11

- ① 秀 ② 周 ③ 修 ④ 収 ⑤ 酬

4 交渉がシユビよくまとまった。

12

- ① 種 ② 首 ③ 主 ④ 守 ⑤ 趣

5 優勝のダイシヨウは大きかった。

13

- ① 称 ② 償 ③ 賞 ④ 章 ⑤ 照

II

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「わかった」という体験は経験のひとつの形式であって、事実とか真理を知ることとは必ずしも同じではありません。^A

真理を発見して興奮出来る人は古今東西を問わず、わずかな人たちにすぎません。しかし、「わかった!」「わからん!」はすべての人が毎日繰り返し繰り返し経験することです。わかったからといって、その都度、真実に近づいているわけではありません。わからなかったからといって、その都度、真実から遠ざかっているわけでもありません。「わかった!」からと言って、それが事実であるかどうかは、実はわからないのです。わかったと感じるのです。あるいはわからないと感じるのです。

納得する、という言葉があります。なるほど、と思うことです。「わかる」の別の表現ですよね。あるいは、合点がゆく、とも言います。これもわかるの別の表現です。あるいは腑ふに落ちる、とも言います。腑とは五臓六腑の腑です。臓というのは中国の古い医学で実質性の臓器のことで、腑というのは中空性の臓器のことです。たとえば肝臓は中が組織で満たされていますから臓で、胃は袋状のもので腑です。わかると、お腹に充実感が生じると言っているのです。

禅の世界には悟りという言葉があります。まったくの門外漢が悟りなどという言葉をもてあそぶのはいささか不謹慎ですが、悟りは「わかった」体験に似ているのではないのでしょうか。たとえば江戸時代の名僧、白隠禪師の『夜船閑話やせんかんわ』には、「われ大悟すること数回、小悟することその数を知らず」などという表現が見えます。筆者は、「悟る」などという人生の大事業は一生に一度生じて、その後は人間として生まれ変わってしまうのだ、と思っていたのですが、白隠さんのいう悟りはそんなものじゃないようです。小悟することその数を知らず、です。たぶん、白隠さんはじつと座っていて、あるいは日常行動していて、時々「あ、わかった」「あ、わかった」と感じるものがあつたのだらうと思います。悟りというわかり方は決しておおがかりなものでなく、ごく日常的なもののようなのです。

ですが、白隠さんは何度も何度もいったい何を悟ったのでしょうか。何がわかったのでしょうか。何が腑ふに落ちたのでしょうか。わかる、という心理的体験のもっとも重要なところはここです。ただ、わかるということではなく、何がわかるのです。

わかるためには「わからない何か^B」がなくてはなりません。「わからない何か」が自分の中に立ち現われるからこそ、「わかって」とする心の働きも生まれるのです。

白隠さんはお坊さんですから、出家という決心をするに至ったならかの契機があったものと思われれます。なぜ、今・ここに生きているのか、そのことにどんな意味があるのかがわからなくなったのかもしれない。その疑問が、何度も何度も小さく解け、時々大きく解けた、と語っているのです。その内容は門外漢にはわかりようもありませんが、疑問に向かい続け、その疑問の答えが与えられる（すなわち、わかる）という、心の動きがあったのだらうとは想像出来ます。

話は飛びますが、日本で初めてのノーベル賞受賞者である物理学者、湯川秀樹さんは中間子というものの存在を夢の中で思っていたのだそうです。

【中略】

夢でわかる、というのはいったいどういうことなのでしょう。実はわれわれの心はいくつもの層をなしており、意識して考えている層というのは、そのいくつもの層の一番上層にすぎないのです。そのことにばかりに集中して取り組んでいる学者にとって、意識に上らない層でも、問題解決に向けて心が働いているのです。夢では、この普段意識に上らない層の活動が活発化し、疑問を解いてくれたのです。

白隠さんの小悟・大悟と湯川さんの夢の中での中間子発見というわかり方では、わかるべき疑問の内容がまるで違いますが、心の動きはそう変わらないのです。疑問があつて、常住坐臥^{じょうじゅうざうが}、それを前から眺め、横から眺め、上から眺め、下から眺め、回して眺め、落として眺めていると、そのうち心がそれを解いてくれることがあるのです。頭が解くのではなく、いわば身体が解いてくれるのです。座禅して存在の疑問に立ち向かっている場合は、その解答がある体験（悟り）として立ち現われ、科学の疑問に立ち向かっている場合は、その解答の筋道が方程式となつて立ち現われるのです。

このようなわかり方はよく「直感的にわかる^D」、というふうに表示されます。直感的にわかる、といっても外の世界から答えが頭の中へ飛び込んでくるわけではありません。あるいは答えが頭のどこかにあつて、その答えに直達する、ということでもありません。

ん。答えは外にも中にもないのです。ちゃんと自分で作り出すのです。ただ、その作り出す筋道が自発的な心理過程に任されていて、意識的にその過程が追いかけられないとき、われわれはほかに表現のしようがないので、直感的にわかった、という表現を使うのです。飛躍があつて答えに到達しているのでは決してなく、心は心なりにある必然的な方法で、疑問を処理し、答えに到達しているのです。ただ、その経過が意識されていないだけです。

その方法は白隠さんでは多分ただ座るということ、あるいはただ深く呼吸するということであり、湯川さんの場合は物理学の概念、記号、相互関係の法則、数式などを駆使する、ということなのです。

また別の^Eわかり方があります。

本を読んでその内容がわかる。テレビドラマを見てその内容がわかる。友人と会話してその意味がわかる。職場で仕事を与えられて、その仕事の内容がわかるなどという時のわかるです。白隠さんや湯川さんのわかったとは、ちよつとまた違います。本を読んでその内容がわかるというのは実は大変なことなのです。だいたい、そんなことは人間だけにしか出来ません。それだけでもこれが生物にとつてどれだけの大事業であるかわかるうというものです。

〔中略〕

曹洞宗を興した鎌倉時代の高僧、道元の文章です。

「自己をはこびて方法を修証するを迷とす。万法すすみて自己を修証するは悟りなり」(道元『正法眼蔵』のうち「現成公案」より) 文法的には特に難しい日本語ではないのですが、よくわかりません。これをわかるためには自己、運ぶ、方法、修証、迷、すむ、悟りという言葉調べて、その意味を知らなければなりません。でも、これらの言葉の意味を知ってみても、よくわかりません。同じ日本語でもわかる文章とわからない文章があるのです。意味がとれない時、われわれはどうするでしょうか。

何度も何度も読み返します。「自己をはこびて方法を修証するを迷とす。万法すすみて自己を修証するは悟りなり」と、また読むわけです。

なんだかわかったような気がします。でもよくわかりません。もう一度読んでみます。「自己をはこびて方法を修証するを迷とす。万法すすみて自己を修証するは悟りなり」。やっぱりわかりません。頭に持ち込んだバラバラの概念はバラバラのまま、ひとつにまとまらないのです。これは古い日本語だからわからないのかもしれませんが。現代文に翻訳すればわかるでしょうか。現代語訳にはこう書いてあります。

「自己の立場から、あれこれ思案して、ものごとの真実を明らかにしようとするのが迷いである。ものごとの真実が自然に明らかになるのが悟りである」。これは禅文化学院というところの人たちによる説明です。少しわかったでしょうか。筆者にはやっぱりわかりません。ものごとの真実が自然に明らかになる、というところがよくわかりません。これではわかるまい、と思われたのか、さらに要約というのがついています。

「要約。自己をむなしくして客観を生かすことによって、真実が明らかになる」。ますますわかりません。

F

それなら科学です。科学者は悟れるのでしょうか？ よくわかりません。

この文がわかる人は多分、悟ったことのある禪家、あるいは悟りたいと日々行を続けている禪家の人たちでしょう。道元のこの文をなぞることで、その言語表現が自己の体験をうまく表現してくれている、と感じられる人たちです。そのような人たちにはこの文が自己の経験に置き換えられ、その通りだ、とわかるのです。わからない場合は心像はひとつにまとまってくれません。いつまでもわけのわからない言葉のつながりのままです。日本語なら誰にでもわかる、というものではありません。わかるためには、その背景になる経験が必要です。説明するとますます心像が増えます。ますますわからなさが増大します。道元のこのダイヤモンドのような表現はギリギリ一杯の言語表現なのです。これ以上短くできないものです。これを理解するには、この心像群の数をさらに減らす方向に向かわないと、わかったことにはならないのです。

わかる、とは自分のものにすることです。長々と文に表現されているものが自分の概念（心像）としてひとつのイメージにまとめられることです。そうなると、今度はそのわかったことを自分の言葉で表すことが出来ます。バター梅ご飯の作り方を書いた権

名さんも、悟りの本質を書いた道元さんも、自分の持っている概念（心像）を、相手に伝わるような言葉に解きほぐしてくれているのです。

その文を読むわれわれはその解きほぐされたものを、もう一度、われわれの心の中で、解きほぐされる前の心像へまとめ直さなければなりません。うまくまとめられると、わかったという感情が生じるのです。心像の数を減らせるのです。このまとめりある心像はモノのイメージとか単語のイメージといった単純な水準のものではありません。それより一段も二段も複雑な心像の複合ですが、ひとかたまりになったものです。

わからないと道元さんの文を読まされた時のように、何度も繰り返して読み返すことになります。心像は羅列されたままで整理されないのです。

（山鳥重 『「わかる」とはどういうことか——認識の脳科学』 筑摩書房 二〇〇二年より引用 問題作成の都合上一部変更）

問三 傍線部C「ノーベル賞受賞者」について、ノーベル文学賞を受賞した人物の組み合わせとして、適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **16**。

- ① 大隅良典、大江健三郎
- ② 大隅良典、山中伸弥
- ③ 川端康成、大江健三郎
- ④ 川端康成、大隅良典
- ⑤ 川端康成、山中伸弥

問四 傍線部D「直感的にわかる」とはどのようなことか、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は **17**。

- ① われわれの語彙が十分でないため、表現のしようがないため、「直感的にわかる」という表現を使っているだけである。
- ② 答えまでの過程が意識されていないが、必然的な方法で、疑問を処理し、答えに到達している。
- ③ 答えが頭のどこかにあつて、必然的に答えに直達している。
- ④ 答えが頭の外にも中にもなく、なんとなく答えを作り出している。
- ⑤ 作り出す答えが自発的な心理過程に任されていて、意識的に過程を追いかけない。

問五 傍線部E「別のわかり方」とはどのようにわかることか、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 18。

- ① 人間だけができる大事業をすること
- ② 自分の心像として、ひとつのイメージにまとめられること
- ③ わけのわからない言葉のつながりを正すこと
- ④ 文章を理解するまで、何度も繰り返し読み返すこと
- ⑤ 自分の持っている心像を相手に伝えること

問六 空欄部 F には、次の枠内のイ〜へで構成された文章が入る。論旨が通る順に並べ替えたものとして最も適切なものを①

〜⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 19。

イ やっぱりよくわかりません。自己をむなしくする、とはどういうことなのでしょう。客観を生かす、とはどういうことなのでしょう。真実が明らかになる、の真実とは何なのでしょう。

ロ 二段構えの現代文の説明でも、よくわかりません。

ハ わからないときはもう一度、ついつい読んでしまいます。「自己をむなしくして客観を生かすことによって、真実が明らかになる」。

ニ その現象の中に真実がある、と言うのでしょうか。

ホ わかる人にはわかるのですが、わからない人にはちんぷんかんぷんです。

へ 客観というのは自分より外の現象です。

- ① イ ↓ ロ ↓ ハ ↓ ホ ↓ ニ ↓ ヘ
- ② ハ ↓ イ ↓ ホ ↓ ロ ↓ ヘ ↓ ニ
- ③ ハ ↓ ホ ↓ ロ ↓ ヘ ↓ ニ ↓ イ
- ④ ロ ↓ ハ ↓ イ ↓ ヘ ↓ ニ ↓ ホ
- ⑤ ロ ↓ イ ↓ ハ ↓ ニ ↓ ホ ↓ ヘ

問七 傍線部G「よくわかりません」について、筆者がこのように述べる理由として、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **20**。

- ① 意味をしらない言葉がたくさんあるため。
- ② 何度も何度も繰り返し読み返していないため。
- ③ 文章が古い日本語であり、現代文に翻訳されていないため。
- ④ わからないという人が、文化学院の人や禅家ではないため。
- ⑤ 概念が羅列されたままで整理されていないため。

問八 次の文章のうち、本文の内容に合致するものとして、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は **21**。

- ① わかるとは、長々と文に表現されているものが自分の心像としてひとつのイメージにまとめられることである。
- ② まとまりある心像はモノのイメージとか単語のイメージでなく、単純な心像である。
- ③ 本を読んでその内容がわかる人は、心像群を羅列することができるからである。
- ④ 高僧である道元は悟りの本質を、自分の持っている心像を相手に伝えるような言葉に解きほぐすこととしている。
- ⑤ わかったことを自分の言葉で表すことができると、おいしいバター梅ご飯をつくることができる。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

22

く

26

。

1 電線をカセツする。

22

- ① 仮
- ② 化
- ③ 科
- ④ 加
- ⑤ 架

2 わが国最大のケンアン事項について考える。

23

- ① 懸
- ② 検
- ③ 険
- ④ 件
- ⑤ 権

3 発掘調査により、イコウが見つかる。

24

- ① 構
- ② 高
- ③ 公
- ④ 校
- ⑤ 考

4 表記のカンリヤクカを行う。

25

- ① 間
- ② 関
- ③ 簡
- ④ 管
- ⑤ 感

5 国民がイクドウオンに反対した。

26

- ① 句
- ② 苦
- ③ 九
- ④ 区
- ⑤ 口

I

解答番号	解答欄					
1	①	②	③	④	⑤	5点
2	①	②	③	④	⑤	5点
3	①	②	③	④	⑤	5点
4	①	②	③	④	⑤	5点
5	①	②	③	④	⑤	5点
6	①	②	③	④	⑤	5点
7	①	②	③	④	⑤	5点
8	①	②	③	④	⑤	5点
9	①	②	③	④	⑤	2点
10	①	②	③	④	⑤	2点
11	①	②	③	④	⑤	2点
12	①	②	③	④	⑤	2点
13	①	②	③	④	⑤	2点

II

解答番号	解答欄					
14	①	②	③	④	⑤	5点
15	①	②	③	④	⑤	5点
16	①	②	③	④	⑤	5点
17	①	②	③	④	⑤	5点
18	①	②	③	④	⑤	5点
19	①	②	③	④	⑤	5点
20	①	②	③	④	⑤	5点
21	①	②	③	④	⑤	5点
22	①	②	③	④	⑤	2点
23	①	②	③	④	⑤	2点
24	①	②	③	④	⑤	2点
25	①	②	③	④	⑤	2点
26	①	②	③	④	⑤	2点